昭和四十五年

日本思想史関係研究文献要目

凡例

一、本要目には、昭和四十五年に発行乃至発表された日本思想史関係の単行本並びに雑誌・紀要論文を収録した。

一、本要目には、日本思想史関係の学術的な研究を選択収録することを原則としたが、一般読者向けのものも適宜収めた。

一、右のように選択した文献を、1単行本目録　Ⅱ雑誌・紀要論文目録の二部に分け、次のように配列した。

Ⅰ Ⅱ部とも、文献をその内容によって、総雑・古代・中世・近世・近代に分け、さらにそれぞれに属する思想史関係研究文献を、一般・学問道徳教育方面・宗教方面・文芸美術芸能方面・政治社会経済方面・その他の項目順に分類配列した。

単行本は、書名・著者名・発行所名の順、論文は、題名・執筆者名・掲載雑誌紀要巻号数の順に記載した。

一、本要目の作成には、東北大学文学部日本思想史学研究室所属の助手・大学院学生があたった。

一、日本思想史という学問の性格上から、研究文献の選択に迷うことが多く、短時日の間に作成したためもあって、文献の選択や配列に不備の点があるものと考えられる。大方の御教示をお願いする。

Ⅰ 単行本目録

総雑

西洋と日本 ―比較文明史的考察　増田四郎編　中央公論社
日本民族文化史　水野祐　雄山閣出版
日本思想の構造（現代のエスプリ）　勝部真長編　至文堂
日本人の意識構造　会田雄次　講談社
日本人の心の歴史上・下　唐木順三　筑摩書房
外国思想の受容と日本　森田康之助　学術書出版会
日本の開明思想　中沢護人　森数男　紀伊国屋書店
日本における理法の問題　金子武蔵編　弘文堂
日本人の倫理思想　筧泰彦　小沢富夫編　東宣出版
日本人の宗教　井門富二夫　吉田光邦編　淡交社
日本宗教の現世利益　日本仏教研究会　大蔵出版
人の死後の話 ―日本人の来世観―　小池長之　学芸図書
密教の日本的展開　勝又俊教　春秋社
ミロク信仰の研究　宮田登　未来社
観音信仰　速水侑　塙書房
時衆年表　望月華山編　角川書店
神道祭祀の研究　岩本徳一　〃
山の宗教＝修験道　五来重　淡交社
仏教文学研究九　仏教文学研究会編　法蔵館
日本仏教美術史叙説　亀田孜　学芸書林
古代・中世社会への抵抗（講座日本の革命思想1）　横田健一編　芳賀書店
幕藩体制下の先駆思想（講座日本の革命思想2）　有坂隆道編　〃
維新変革の論理（講座日本の革命思想3）　岩瀬昌登編　〃
民主革命思想の胎動（講座日本の革命思想5）　高畠徹郎編　〃
変革者の思想　奈良本辰也　講談社

古代

聖徳太子　大野達之助　吉川弘文館
三経義疏の倫理学的研究　白井成允　百華苑
日本書紀研究四　三品彰英編　塙書房
日本神話論（三品彰英論文集1）　三品彰英　平凡社
日本神話　上田正昭　岩波書店
日本神話伝承　肥後和男　雲華社

日本神話の形成　松前　健　塙書房
日本神話と古代生活　〃　岡田精司　有精堂出版
古代王権の祭祀と神話　坂本太郎　塙書房
六国史　吉川弘文館
源氏物語の精神的基底　小野村洋子　創文社

中世

中世日本人の思惟と表現　桜井好朗　未来社
乱世の精神史 ―中世日本の思想と文化―　西田正好　桜楓社
無常観の系譜　〃　〃
浄土宗開創期の研究　香月乗光編　平楽寺書店
法然　梶村昇　角川書店
法然　大橋俊雄　評論社
親鸞　古田武彦　清水書院
親鸞教学の基礎的研究　石田充之　永田文昌堂
親鸞聖人選述の研究　生桑完明　法蔵館
人間蓮如　山折哲雄　春秋社
一向一揆　笠原一男　評論社
日蓮　高木豊　〃
日蓮　中島尚志　三一書房
中世禅宗史の研究　今枝愛真　東京大学出版会
人間道元　佐橋法竜　春秋社
道元　今枝愛真　評論社
一休　市川白弦　日本放送出版協会

近世

中江藤樹伝及び道統　後藤三郎　理想社
蛮社の獄　芳賀登　秀英出版
小関三英伝　杉本つとむ編　敬文堂出版部
「和論語」の研究　勝部真長　至文堂
近世藩校に於ける学統学派の研究下　笠井助治　吉川弘文館
日本の藩校　奈良本辰也　淡交社
江戸時代の教育　ドーア　松居弘道訳　岩波書店
南蛮のバテレン ―東西交渉史の問題をさぐる―　松田毅一　日本放送出版協会
バテレンの道　岡田章雄　淡交社
普光観智国師 ―近世における浄土宗の発展―　玉山成元　白帝社
中山みき　小栗純子　新人物往来社
二宮尊徳仕法の研究　岩崎敏夫　錦正社
農民撫擦の思想史的研究　布川清司　未来社
革命の旅人 ―平野国臣の生涯―　森田芳雄　新人物往来社

近代

明治の文化　色川大吉　岩波書店
明治文化研究五　明治文化研究会　日本古書通信社
近代日本の思想家　家永三郎　有信堂
日本の政治文化　石田雄　東京大学出版会
近代文化と社会主義　飛鳥井雅道　晶文社
日本の合理論　鈴木正　ミネルヴァ書房
福沢諭吉　遠山茂樹　東京大学出版会
近代日本の哲学と実存思想　湯浅泰雄　創文社
日本近代教育の思想構造—福沢諭吉の教育思想研究—　安川寿之輔　新評論
愛国心教育の史的研究　大槻健・松村憲一　青木書店
明治維新と歴史教育　田中彰　〃
軍国主義教育の歴史　小川太郎編　明治図書出版
日本近代社会と仏教　吉田久一　評論社
国家神道　村上重良　岩波書店
日本キリスト教史　海老沢有道・大内三郎　日本基督教団出版局
日本の近代社会とキリスト教　森岡清美　評論社
大本教事件　出口栄二　三一書房
近代日本政治思想史Ⅱ　橋川文三・松本三之介編　有斐閣
民衆憲法の創造　色川大吉　評論社
天皇機関説事件上・下　宮沢俊義　有斐閣
昭和の反体制思想（講座日本社会思想史）　住谷悦治他編　芳賀書店
北一輝論　村上一郎　三一書房

II　雑誌・紀要論文目録

総雑

日本思想史の方法　児山敬一　東洋学研究三
思想史の意味　西谷敬　神戸女学院大学論集一六—三
史学史と歴史哲学　藤戸正三　歴史教育一八—一
日本史学史研究の方法　小沢栄一　〃　〃
法語と文学—思想史と文学史とのわかれめについて—　桜井好朗　日本文学一九—一
現代史と価値理念覚え書き　市井三郎　思想五四八
日本における学問の展開　肥後和男　歴史教育一八—五
我が国に於ける「五行大義」の受容について　中村璋八　駒沢大学文学部研究紀要二八
日本における因明研究とその資料について　武邑尚邦　竜谷大学仏教文化研究所紀要九
本邦シャマニズムの変質過程—とくに地蔵信仰との習合について　桜井徳太郎　日本歴史二六二

エビス神信仰の研究
—エビス神を祀る神社の問題　吉井貞俊　国学院大学日本文化研究所紀要二四

雷神信仰の三段階　上田さち子　歴史研究（大阪府大）一二

神道における陰陽道思想とその展開—一試論—　岩佐貫三　東洋学研究四

加賀・越中における時宗史試論　石崎直義　北陸史学一五

甲州郡内地方の神道（承前）　深山忠六　神道学六四

沖縄の固有宗教研究
—鳥越理論の問題点　与那国暹　社会学年誌一〇

日本文化本質論　下店静市　文化史学二五

日本人のこころの美
—精神史的考察—　森田康之助　日本歴史二六六

石田英一郎著「日本文化論」　江村洋　比較文学研究一七

肥後先生古稀記念論文刊行会編「日本民族社会史研究」・「日本文化史研究」　伊東多三郎　日本歴史二六一

宮田登著「ミロク信仰の研究」
—日本における伝統的メシア観—　赤田光男　日本民俗学七二

古代

古代における日本人の思考—固有信仰の起源をめぐって—1—　芝烝　京都女子大学人文論叢一八

古代文学と無常観　中西進　国文学解釈と鑑賞三五—八

平安初期の学問　大曾根章介　歴史教育一八—五

平安後期における学問の展開　川口久雄　〃　〃

吾国上代の私的教育施設について　村上唯雄　熊本大学教育学部紀要（二人文科学）一六

最澄の教育—その人間形成論を中心として　吉川正二　甲南女子大学研究紀要六

葬送儀礼と他界観念　上田正昭　国文学解釈と鑑賞三五—八

天武朝における国家仏教の成立について　柴山正顕　日本仏教三二

受容教典に見られる奈良仏教の性格　竹田暢典　南都仏教二五

奈良朝における密教の性格
—正倉院文書を中心として　和田悌一　精神科学九

鑑真和上の律宗　徳田明本　南都仏教二四

奈良時代末期の民衆と仏教　奥田尚　待兼山論叢三

若き空海の批判思想
—〈三教指帰〉の成立　上坂喜一郎　密教文化九一

弘法大師空海の声字観　松崎恵水　印度学仏教学研究一八—二

叡山大師伝の性格　福井康順　〃　〃

徳一の「遮異見章」について　田村晃祐　〃　〃

平安浄土教の性格　速水侑　東海史学六

平安末期の興福寺
—御寺観念の成立—　日下佐起子　史窓二八

霊異記の仏菩薩信仰　入部正純　文学・語学五四
今昔物語集における観音信仰　佐原作美　駒沢国文八
天津罪と国津罪―罪と穢　梅田義彦　神道学六五
古代丹波（たには）の研究―宮廷信仰と地方信仰と　西村亨　慶応義塾大学言語文化研究所紀要一
祇園社と陰陽道　久保田収　神道史研究一八―二
院政期の陰陽道　村山修一　史林五三―二
坂ノ上田村麻呂の信仰　松本大円　印度学仏教学研究一八―二

古事記再発見への前提―2―国学的古事記観の克服　梅沢伊勢三　文芸研究六二
古事記神話の成立に関する覚書　川副武胤　日本歴史二六一
近親相姦の神話―イザナキ・イザナミの物語をめぐって　西郷信綱　展望一三九
出雲国引き神話の成立―1・2―　井上実　神道学六四・六五
誓約神話における熊野櫲樟日命　鎌田純一　国学院雑誌七一―九
ヤマタノオロチ退治の神話―その分析と史的再構成　三品彰英　古代学一六―二・三・四
万葉歌人の季節感―人麻呂歌集非略体歌の霞・霧・雪を中心に　渡瀬昌忠　上代文学二六
古代和歌における心物対応構造―万葉から平安和歌へ―　鈴木日出男　国語と国文学四七―四

家持抒情歌のなりたち―仏教的傾斜の意味　中川幸広　語文（日大）三三
「日本霊異記」説話の発生と趣向―主として「冥報記」との関係において　渥美かをる　愛知県立大学説林一八
枕草子に現われた美的理念としての「をかし」　古賀光恵　実践文学四〇
源氏物語の倫理思想―3―宿世の意識を中心として　重松信弘　国文学研究（梅光女学院大）五
源氏物語の罪について―特に柏木の場合をめぐって　岡野道夫　語文（日大）三三
宇治十帖結末部の方法と思想―いわゆる浮舟の還俗問題を中心に　武原弘　国文学研究（梅光女学院大）五
六条御息所の死霊―「若葉下」の巻の怪異描写　岡田藤吉　東京学芸大学紀要（二人文科学）二一
女流の歌にみる怨念の系譜　馬場あき子　国文学言語と文芸一二―六
今昔物語集における夢の位置―本朝仏法部を中心に　上岡勇司　国学院雑誌七一―二
芸能発生の前史―院政期往生伝における聖の唱導　桜井好朗　芸能史研究三〇
古代の天皇　肥後和男　古代学一六
「天皇」号成立の時代について　大橋一章　歴史教育一八―七
記紀における天皇観の相違　倉野憲司　国学院雑誌七一―一一
古代王権祭祀と神話　松前健　文学三八―二

古代出雲の氏族的背景—大穴持神信仰の変貌と出雲の内乱　三谷栄一　国学院雑誌七一—二

日本思想史の或る出発点—「見立て」について　鈴鹿千代乃　国学院雑誌七一—四

聖徳太子私観　肥後和男　立正大学文学部論叢三七

上田正昭著「日本神話」—日本神話の原像に対決　鳥越憲三郎　風俗九—二

岡田精司著「古代王権の祭祀と神話」　青木紀元　万葉七四

目崎徳衛著「平安文化史論」　山本信吉　国史学七九

中世

中世宋学史の展望—問題点と旧説批判　和島芳男　日本歴史二六二

鎌倉時代の学問　結城陸郎　歴史教育一八—五

鎌倉武家社会における学問意識　佐藤和夫　日本思想史学二

室町時代における学芸の発展　芳賀幸四郎　歴史教育一八—五

戦国武士と学問　小川信　〃　〃

「元亨釈書」禅僧伝記選別の基準　葉貫磨也　日本歴史二六三

「堺記」と「応永記」—十五世紀の歴史叙述における諸問題　加地宏江　日本史研究一一五

「忠」の東漸—能楽「安宅」の場合　市村宏　東洋学研究三

鎌倉仏教と体制イデオロギー　北西弘　日本仏教学会年報三四

聖徳太子廟の信仰と鎌倉仏教　藤田清　〃　〃

旧仏教における復古思想　納富常夫　〃　〃

鎌倉期における真言教学上の問題点—頼瑜・位置と思想　佐藤隆賢　〃　〃

「摧邪輪」と親鸞教学との対応—教・行の問題を中心として　嬰木義彦　真宗学四一・四二

晩年の忍性と西大寺—四天王寺所蔵の新史料〔永仁四年申状案含全文翻刻〕によりて　和島芳男　南都仏教二四

伊豆山源延とその浄土教　三田全信　仏教大学研究紀要五四

末法思想の一考察　浅野教信　真宗学四一・四二

浄土教における宗教的主体性の一断面—末法思想の宗教学的考察　藤本浄彦　浄土宗学研究四

日本浄土教の特質と浄土真宗　石田充之　真宗学四一・四二

善導浄土教と法然浄土教—貞慶・高弁の反論を参考として　紅楳英顕　竜谷大学仏教文化研究所紀要九

念仏行における倫理性—特に法然を中心として　高橋弘次　人文学論集（仏教大）三

来迎思想—法然とその門下—一—　浅井成海　竜谷大学論集三九三

法然の思想と実践　河内祥輔　歴史学研究三六五

親鸞における罪業の自覚　小野蓮明　印度学仏教学研究一八―二
親鸞上人の往生思想　山本仏骨　真宗学四一・四二
親鸞における善と真実　村上速水　〃　〃
親鸞の宿業説―「歎異抄」第十三章の理解　宮地廓慧　日本仏教三二
親鸞教学における行と信　米田成夫　哲学（広島哲学会）二三
親鸞における念仏の意義（補論）　上原英正　淑徳大学紀要四
親鸞における「如来と等シ」の思想　信楽峻麿　真宗学四一・四二
「教行信証」における行の意義　仁科弘　哲学（広島哲学会）二一
現世利益和讃の背景　嬰木義彦　竜谷大学論集三九二
「根本悪」に関する考察―歎異抄を中心として　西崎京子　学習院大学文学部研究年報一六
真宗思想における倫理性の問題　徳永道雄　竜谷教学四
初期真宗教団における思想的系譜―越前を中心として―一―　重松明久　金沢文庫研究一六―一一
浄土異流の他力思想と真宗の他力思想の相違性―証空の他力思想を中心として　浅井成海　竜谷教学五
歎異抄と蓮如教学　神子上恵竜　真宗学四一・四二
中世末期の仏教と民衆生活―特に蓮如の呪術的宗教の否定を巡って　星野元貞　竜谷大学仏教文化研究所紀要九
蓮如の宿善観　江隈薫　印度学仏教学研究一八―二
道元の哲学―上―　杉浦守　山口大学教育学部研究論叢（人文社会科学）一九
道元禅に於ける受戒と懺悔―道元禅師と「梵網経略抄」の所説について　黒丸寛之　北海道駒沢大学研究紀要五
道元の哲学と宗教　米倉守　日本大学理工学部一般教育教室彙報九
仏教思想史上における道元　玉城康四郎　日本仏教学会年報三四
道元の思想における言葉の意味　春日佑芳　実存主義五〇
湛然の基礎的研究―典籍資料を中心として　納富常夫　金沢文庫研究一六―一
中世における一自由衆団の禅―遠山の一派　古田紹欽　禅学研究五八
一休禅師と白隠禅師の浄土観―浄土宗義現代化の一視点　服部英淳　浄土宗学研究四
寂室元光の禅風―隠逸幽趣の禅　中川徳之助　国文学攷五二
安房に帰った日蓮　高木豊　金沢文庫研究一六―三
末法思想に関する試論―「末法為正」（日蓮）の意味について　町田是正　日本仏教学会年報三四
日蓮における末法思想の受容と克服　扇田幹夫　神戸女学院大学論集一六―三

歴史観における日蓮の特色　茂田井教亨　日本仏教学会年報三四
日蓮の宗教における一般性と特殊性　宮崎英修　〃　〃
日蓮の宗教性の人間学的考察　門脇佳吉　カトリック神学一七
時衆と神祇―特くに祖真教の熊野神に対する態度　大橋俊雄　印度学仏教学研究一八―二
捨聖の生死観―一―一遍聖の生死観を中心として　石岡信一　〃　〃
一遍における出家の動因についての考察　〃　東洋学研究二
一遍上人の他力思想　梯実円　竜谷教学五
日本書紀と伊勢神道書　鎌田純一　国学院雑誌七一―一一
経の説話―観音霊験譚の変貌　益田勝美　日本文学一九―七
中世歌道における灌頂伝授について　三輪正胤　中世文学一二
方丈記の主題　祐野隆三　国文学一五―四
親鸞と平家物語　赤松俊秀　日本歴史二七二
文覚説話が意味するもの―平家物語の原本についての続論―下　〃　文学三八―一〇
夢窓疎石と兼好　武石彰夫　日本文学研究（佐伯梅友先生古稀記念論集）
兼好の仏道に対する態度―「徒然草」第一七段の解釈をめぐって　富山奏　四天王寺女子大学紀要二
徒然草における教訓の意味論的分析　林一夫　人文研究（大阪市大）二一―六
徒然草における無常観についての試論　小田寛子　東洋学研究二
「徒然草」における思惟と表現―序奏風の考察　桜井好朗　国文学言語と文芸一二―三
美の誕生の原点―二条良基を中心に　吉村貞司　武蔵野女子大学紀要五
世阿弥の「安位」について　井関保　相模女子大学紀要三三
世阿弥の方法―「離見の見」とその能芸意識をめぐって　松本孝造　国語国文三九―四
「風姿花伝」における「序破急」構造の問題点について―「問答条々」を中心にして　辻宏　文学語学五三
草根集巻九における人間観　児山敬一　東洋学研究二
中世武家法における思想の一系譜　新妻俊次　歴史教育一八―八
桜井好朗著「中世日本人の思惟と表現」　伊藤博之　文学三八―六
桜井好朗著「中世日本人の思惟と表現」　三木紀人　国語と国文学四七―九
西田正好著「無常観の系譜」　梶原正昭　国文学研究（早大）四二

大橋俊雄著「法然―その行動と思想」　三田全信　日本仏教三二
大橋俊雄著「法然―その行動と思想」　広川堯敏　浄土宗学研究四
望月華山編「時衆年表」　菊地勇次郎　史学雑誌七九―七

近世

日本の儒学と藤原惺窩　阿部吉雄　斯文五九・六〇
羅山学と惺窩学の異同　今中寛司　歴史教育一八―五
『天正記』から『太閤記』へ―近世的歴史観の発生　玉懸博之　日本思想研究四
近世史学の形成と林鵞峰　小沢栄一　東京学芸大学紀要（三社会科学）二二
新井白石の経世思想　播磨定男　中央学院大学論叢（一般教育）五―二
白石の史学　〃　〃　歴史教育一八―一
「新室手簡」より見たる晩年の新井白石　〃　図書館学会年報一六
藤樹研究―一―　大川良一　香川大学教育学部研究報告（第一部）二七
伊藤仁斎著「童子問」（回想・この一冊―五―）　中村幸彦　国文学一五―一二
徂徠と法　布施弥平治　日本法学三五―三
荻生徂徠の都市―江戸―批判　大久保達正　東洋研究二三
徂徠学における道徳論―いわゆる古学派の倫理説―二―　村上敏治　京都教育大学紀要（A人文・社会）三六
徂徠の言語記号説　岡阪猛雄　〃　〃
岡嶋冠山研究―二―　潟沼誠二　国語国文研究四五
江戸時代における二つの翻訳学の連関と性格　藤原暹　文芸研究六二
太宰春台の思想史的体質のもの―その著「独語」の上の　藤井正夫　東洋学研究二
太宰春台の孤独　野口武彦　文学三八―一二
太宰春台の経済思想―特に貨幣論を中心として―三―　渡辺与五郎　亜細亜大学経済学紀要五
太田南畝の「転向」　野口武彦　中央公論八五―一一
五井蘭洲の文学観　中村幸彦　文学研究（九大）六六
片山北海年譜攷　多治比郁夫　大阪府立図書館紀要六
佐藤一斎の短歌　田中佩刀　明治大学教養論集五八
賀茂真淵書簡の研究―三河植田家との関係において　近藤恒次　愛知大学綜合郷土研究所紀要一五
宣長雑考　長尾龍一　社会科学紀要一九
呵刈葭論争と剽窃論争　藤原暹　文芸研究六四
本居宣長の精神形成―京都遊学以前について　松本滋　やまと文化五〇

本居宣長の物のあはれ説　重松信弘　皇学館論叢　三―三

国学者における「死」の問題―宣長・篤胤の場合―上―　守蘇谷正彦　国学院雑誌　七一―八

宣長の人間観と美意識との関連―玉かつまを中心として　久松潜一　鶴見女子大学紀要五

国学について―宣長の学問観私考　安津素彦　日本文学論究　二五

宣長「もののあはれ」論と法然浄土教思想との関連について　小椋嶺一　国語国文　三九―六

宣長の「安心論」をめぐって―神道と人の生き方について　戸田義雄　自由一二―八

本居宣長における詩語と古語―「新古今和歌集義濃の家づと」の定家批判を中心に　野口武彦　文学三八―四

本居宣長―二八～三二―　小林秀雄　新潮六七―二～一〇

本居宣長の思想における行為の問題　池内健次　天理大学学報　二一―一

「古学要」をめぐる二、三の問題　山崎進児　和歌山大学教育学部紀要（人文科学）一九

平田篤胤著「新鬼神論」―上―　三木正太郎　皇学館論叢　三―三

平田篤胤著「新鬼神論」―下―　〃　〃　三―四

篤胤を主とせる国学書管見―漢学との交渉・其他　滝沢精一郎　日本文学論究　二五

宣長学統の継承―宣長没後の鈴門と篤胤の立場　内野吾郎　〃　〃

洋学者の国史への省察　森田康之助　歴史教育　一八―一

「坤輿万国全図」と鎖国日本―世界的視圏の成立　般越昭生　東方学報四一

「阿蘭陀通詞」の語学学習について―洋学教育史研究のために―中―　田中克佳　慶応義塾大学学院社会学研究科紀要一〇

阿蘭陀通詞馬場佐十郎に受益の江戸の蘭学者達　片桐一男　法政史学二三

杉田玄白と海外情報　〃　日本歴史二七二

洋風画家石川大浪と江戸の蘭学界―上・下―　〃　Museum　二二七、二二八

平賀源内の思想的立場　城福勇　文化史学二四

宝暦末年ごろの平賀源内二題―「物類品隲」刊行前後の彼と風来山人の誕生と　〃　香川大学教育学部研究報告（第一部）二八

平賀源内の新出書簡　浜田義一郎　大妻国文　一

司馬江漢の生年について　細野正信　Museum　二三〇

司馬江漢の「西遊旅譚」　〃　日本歴史二七〇

司馬江漢のパラディス―未公開の「独笑妄言」を中心として（付全文翻刻・注）　〃　季刊芸術四―三

幕末近代思想の系譜―二―子平と利明を中心に　塚谷晃弘　国学院経済学　一八―二

シーボルトと日本婦人　石川澄雄　日本歴史二六九

江戸時代の学者の生態と学者批判論　伊東多三郎　〃　二六五

梅岩に関する小論—性・理・心について　多田顕　千葉大学教養部研究報告(A)一展望一三四—一三七

頼山陽の学芸—二〜五完—　中村真一郎　九州文化史研究所紀要一五

江戸時代における元亟研究　川添昭二　玉川大学文学部論叢一〇

近松の虚実論と武芸書と医方書と　上原輝男　近畿大学教養部研究紀要一

広瀬淡窓の易理観—人間性研究の一環として　大久保勇市　すばる一

化政期の知識人—頼山陽の四人の知友　中村真一郎　史学研究一〇八

宝暦期長府藩における実学の実践とその挫折　小川国治　東洋研究二二

佐藤一斎先生の哲学〝霊光〟について　鬼頭有　日本歴史二六四

広瀬淡窓の思想と教育　青野春水　東洋研究二一

吉田松陰の学術と思想　山崎道夫　国士舘大学人文学会紀要二

吉田松陰・留魂録の研究　前野喜代治　三重県立大学研究年報(第一部人文・社会科学)六—二

本草学者西村広休の研究　松島博　思想五四八

二宮尊徳—「三才報徳金毛録」を中心として　奈良本辰也　国学院雑誌七一—四

岡松甕谷の西史漢訳意見〔含全文紹介〕　秋元信英

近世都市論の展開・統一国家への構想　西川幸治　思想五四九

近世豪農層の意識—尾張南西部地域の一庄屋の場合　小島広次　徳川林政史研究所紀要昭和四四年度

京都商人の商魂について—京都の老舗における店則から—一—　足立政男　立命館経済学一八—二・三

幕末における二つの窮理観(徳川時代における合理的思惟の展開—一〇—)　源了円　心二三—六

紅毛の学者(外国人と日本の歴史—四—)　渡辺保　〃　〃

幕末・丙寅の年—明治維新観の視点整理　宗友重孝　麻布獣医大学教養課程研究報告七

幕末海外留学史稿—一—　石附実　天理大学学報二一—二

横井小楠実学の一系譜—いわゆる透谷的なるものの反措定　槇林滉二　日本文学一九—八

日本近代教育思想史試論—近世におけるその萌芽　土屋忠雄　教育学雑誌三・四

近世における陰陽道思想の歪雑性とその残滓—河内・陰陽戸を中心として　岩佐貫三　東洋学研究三

古橋家の倫理思想—暉児(てるのり)の場合を中心に　布川清司　思想の科学一〇九(別冊二)

「女五経」について　青山忠一　二松学舎大学論集昭和四四年度

鈴木正三の庶民教化　柏原祐泉　大谷学報四九—二

経済思想史に於ける〔鈴木〕正三　多田顕　千葉大学教養部研究報告(A)二

江戸後期経済学派の思想　中泉哲俊　歴史教育一八―五

風土と信仰―キリシタンの受容と変容　助野健太郎　聖心女子大学論叢三三

日本のキリシタン研究の社会―文化的条件　井伊玄太郎　教養諸学研究三三

「弾邪半百則」―幕末期の一破邪資料　吉田寅　キリスト教史学二三

武田領国支配における禅宗の発展　村上直　日本仏教学会年報三五

法華・念仏勝劣論の展開―「日蓮秘伝血脈」をめぐって「含翻刻」　北西弘　日本史研究一一五

近世初期京都町衆の法華信仰　冠賢一　日本仏教学会年報三五

他力信心の本質と発現について―特に妙好人の上にみる　藤原真哲　竜谷教学五

近世文芸の宗教的史観―五―ばさら・かぶきと茶道秩序　村田昇　国文学研究五

近世末期の修験と富士講　和歌森太郎　日本歴史二七二

徳川政権委任論　藤井貞文　日本歴史二七二

百姓一揆の思想史的考察　高野実　精神科学九

安藤昌益の社会変革論　三宅正彦　日本史研究一一五

長州藩国事奔走への貽動―ハリスの幕閣入説と吉田松陰―上・中・下―　永江新三　芸林二〇―六～二一―二

松平春嶽の諸侯会議政治論の採用―国是決定方策を中心に　河北展生　史学四三―一・二

近世における「書く」意識の生成―仮名草子をめぐって　森山重雄　文学三八―四

素堂と老荘―貞享期　広田二郎　専修国文八

江戸の美意識についての試論　江口正一　Museum二二八

「日本のカテキズモ」をよむ　亀井孝　ビブリア四五

ヴァリニャーノ著　家入敏光訳編「日本のカテキズモ」　井手勝美　〃　〃

武田勘治著「近世日本学習方法の研究」と山下武著「江戸時代庶民教化政策の研究」　石川松太郎　教育学研究三七―一

柏原祐泉「日本近世近代仏教史の研究」　吉田久一　史学雑誌七九―三

近藤啓吾氏著「浅見絅斎の研究」　久保田収　神道史研究一八―四

小川常人著「真木和泉の研究」　荒川久寿男　〃　一八―三

近代

明治の精神　石田一良　日本思想史研究四

近代学問の成立　小沢栄一　歴史教育一八―五

日本近代思想史に及ぼせる儒学の影響―佐久間象山の位置　倉田信靖　東洋研究二一

明治における儒教の評価　柴田実　日本思想史学二

明治開化期の史学とフランス史学　荒川久寿男　歴史教育一八―一
日本主義時代の国史への省察―陸羯南と井上毅　水野主計　〃　〃
日本主義の時代の歴史観への省察―徳冨蘇峰　原口宗久　〃　〃
国学の研究と国史学―明治の国学者と国史学の関連に限定して　芳賀登　〃　〃
明治末における文学史の回顧　親見吉治　〃　〃
大正教養派の思想的限界　神田正臣　国立音楽大学研究報告五

紀州と福沢諭吉　会田倉吉　史学四三―一・二
福沢諭吉とその漢学観　三浦叶　斯文五八
福沢諭吉の宗教観　佐志伝　史学四三―一・二
西周における「理」の観念の転回―徳川時代における合理的思惟の発展―11完―　源了円　心二三―七
西周の「生性発蘊」とコントの人間性論―資料とその検討　小泉仰　哲学（三田哲学会）五六
「百一新論」における西周の人間性論と荻生徂徠　〃　〃　五五
明治期における西洋哲学の受容と展開―西周・西村茂樹・清沢満之の場合―続の2―　峰島旭雄　早稲田商学二一一
〃　―続の3―　〃　〃　二一六

加藤弘之の初期思想―西洋的政治原理と儒教―　渡辺和靖　日本思想史研究四
小野梓と西洋政治思想―リーバー・ウルジーとの関連　山下重一　早稲田大学史紀要三
民権期の啓蒙思想家中江兆民　山田洸　宮城教育大学紀要四
明治期におけるプラグマティズム受容の基盤―大西祝の哲学　山田英世　日本デューイ学会紀要一一
「日本開化小史」の歴史観　岩佐久江　法政史学二三
岡倉天心とパンアジア主義　奥村房夫　海外事情一八―一一
ラフカデオ・ハーンと明治のメンタリティー―2完―　渡部昇一　世紀二四五
吉野作造の明治文化研究　三谷太一郎　国家学会雑誌八三―一二
吉野作造と大学普及運動　太田雅夫　キリスト教社会問題研究一六・一七
吉野作造年譜　太田雅夫　キリスト教社会問題研究一六・一七
山本宣治研究―生物学研究と「人生生物学」―2―　佐々木敏二　〃　〃
三木清の親鸞理解について　遠山諦虔　理想四四三
和辻哲郎論―日本的エートスとパトスの探求者　山県三千雄　人文論集（早大法学会）七
近代における庶民層への国史教育の深化―寺子屋を中心にして　吉田太郎　歴史教育一八―一

学制期における人間形成論 ―啓蒙思想家の教育的志向を中心にして　川瀬八洲夫　東京家政大学研究紀要一〇

教育勅語発布以後の修身教育に関する一考察　安藤忠　教育学雑誌三・四

女子教育と国民的自覚の方向 ―明治二五年の宮城女学校ストライキ事件とその周辺 ―一―　斉藤昭　皇学館論叢三―一

〃 ―二―　〃　〃

明治後期における個性尊重主義家庭教育の展開　小林輝行　〃　人文論究（函館人文学会）三〇

福沢諭吉の実学思想と教育観　河原美耶子　教育学雑誌三・四

福沢諭吉における「啓蒙」と社会教育概念の原点　松村憲一　社会科学討究一六―一

森有礼と女子教育 ―ホレース・マンとの関係　秋枝華子　文芸と思想三二

谷本富における教育思想の変遷　堀松武一　東京学芸大学紀要（教育科学）二二

明治仏教における救世浄聖観展開の基盤について　池田英俊　印度学仏教学研究一八―二

近代浄土教における我の自覚史　河波昌　東洋学研究三

清沢満之の教育 ―仏教教育史の一試論　斉藤昭俊　智山学報一八

清沢満之の「精神」について　寺川俊昭　大谷大学研究年報二二

近代日蓮主義の思想と行動 ―大正末～昭和前期における日蓮宗の動向　石川康明　現代宗教研究所所報四

神道国教政策下の真宗 ―真宗教団の抵抗と体制への再編成　福嶋寛隆　日本史研究一一五

「奉教趣意書」成立に関する若干の考察　杉井六郎　キリスト教社会問題研究一六・一七

植村正久における「キリスト教」と武士道 ―初代プロテスタント『福音』理解の一典型　田代和久　日本思想史研究四

小崎弘道の思想と行動　土肥昭夫　キリスト教社会問題研究一六・一七

小崎弘道「政教新論」の一考察　熊谷一綱　関西学院大学社会学部紀要二〇

フランス・キリスト教思想の植村正久への影響　森川甫　〃

内村鑑三不敬事件 ―その思想史的考察　鷲見誠一　法学研究（慶大）四三―一〇

研成義塾の人びと　宮沢正典　キリスト教社会問題研究一六・一七

明六社における文学観 ―近代日本文学史論― 一―　田中栄一　新潟大学教育学部紀要一一―一

没理想論争　重松泰雄　国文学解釈と鑑賞三五―七

人生相渉論争　平岡敏夫　〃

自然主義論争　榎本隆司　〃

明治の文学論における自然観 ―一― 鷹津義彦 立命館文学 二八七
「教育小説」の系譜とその意義 家永三郎 文学 三八―六
国木田独歩と吉田松陰 桑原伸一 語文(日大)三三
独歩における愛国心 福田容子 日本文学 一九―五
国木田独歩の運命観と近代的運命劇の創造 北野昭彦 立命館文学 二七七
国木田独歩と植村正久―佐伯時代以前を中心に 鈴木秀子 聖心女子大学論叢 三三
植村正久における文学的人間像 大内三郎 文芸研究 六五
透谷の「明治文学管見」について―「文学」意識と「文学史」意識の狭間から 辻本雄一 日本文学 一九―四
北村透谷の文学観―人生相渉論争を通して 小牧美那子 竜谷大学仏教文化研究所紀要九
透谷における自我解放の方向 〃 国文学論叢一五
北村透谷における歴史意識―「史」の問題 槇林滉二 広島文教女子大学研究紀要 四
露伴・もうひとつの「近代」―明治文学史の一節として 猪野健二 文学 三八―一〇
小諸義塾と木村熊二と藤村 村田治夫 国学院雑誌 七一―一〇
紅葉文学における思想性 西尾能仁 国文学言語と文芸 一二―六
漱石の革新的思想に就いて 武田宗俊 心 二三―一〇
漱石における神―「道草」をめぐって 佐藤泰正 国文学 一五―五
漱石における個人と国家 ―上― 小沢勝美 日本文学 一九―一一
漱石「心」の根底―「明治の終焉」の設定をめぐり 小泉浩一郎 文学・語学 五三
啄木の出発―その社会思想における 鹿野政直 日本歴史二七二
啄木晩年の浪漫意識 明珍昇 日本文学 一九―一一
啄木と折芦 助川徳是 文芸と思想三二
思想家としての平出修―思想家発掘 伊豆公夫 歴史評論二三四
明治四十三年秋―中里介山と大逆事件 尾崎秀樹 文学三八―一〇
蘆花徳富健次郎 ―一六―二五― 中野好夫 展望 一三四―一四四
芥川における知識人と大衆―「西方の人」をめぐって 梶木剛 国文学 一五―一五
明治維新草莽諸隊の構成―相楽総三とその同志について 高木俊輔 徳川林政史研究所紀要昭和四四年度
維新期の農民闘争とその思想 有元正雄 史学研究一〇七
明治維新「複合革命論」と明治憲法の性格 梅田正義 中村吉男 広島大学教育学部紀要(第二部)一八
明治前半期におけるアジア観の諸相 本山幸彦 人文学報(京大)三〇
明治前期の中国開発論―日本とリヒトホーヘンの眼 吉田光邦 〃 〃

維新前後における軍制の思想 ―二― 針生清人 東洋大学紀要 二三

日本と中国における初期立憲思想の比較研究―とくに加藤弘之と康有為の政治思想を中心にして―二、三― 許介鱗 国家学会雑誌 八三―七・八、八三―九・一〇

万国対峙論の意義と限界 藤村道生 九州工業大学研究報告 一八

徳富蘇峰の中国観―とくに日清戦争を中心として 杉井六郎 人文学報（京大） 三〇

明治時代における想定敵国の変遷 松下芳男 軍事史学 一三

「協救社衍義草稿」の紹介―明治前期「国益」思想の一例 藤田貞一郎 同志社商学 二一―五・六

玄洋社の大陸政策 西尾陽太郎 歴史教育 一八―四

征韓論・自由民権論・文明開化論―江華島事件と自由民権論 山田昭次 朝鮮史研究会論集 七

自由民権期における興亜論と脱亜論―アジア主義の形成をめぐって 〃 〃 六

日本的「立身・出世」の意味変遷―近代日本の精神形成研究覚書 門脇厚司 教育社会学研究 二四

日本における資本主義的精神の形成―とくにナショナリズムとの関連について 木村時夫 社会科学討究 一六―一

明治憲法体制とロエスレル―ヨハネス・ジーメス「日本国家の近代化とロエスラー」によせて 鈴木安蔵 国家学会雑誌 八三―七・八

天皇制国家の道徳原理 石関敬三 社会科学討究 一五―三

地方改良運動の論理と展開―日露戦後の農村政策―二― 宮地正人 史学雑誌 七九―九

明治期模範村と老農の研究 江守五夫 法律論叢（明大） 四二―三

明治社会主義の思想 松沢弘陽 日本政治学年報 一九六八年

明治社会主義者の転向―一―木下尚江（上） しまねきよし 思想の科学 一〇二

―二― 〃 （中） 〃 一〇四

―三― 〃 （下） 〃 一〇五

―四―西川光次郎（上） 〃 一〇六

―五― 〃 （中） 〃 一〇七

―六― 〃 （下の一） 〃 一〇八

―七― 〃 （下の二） 〃 一一〇

―八―白柳秀湖（上） 〃 一一一

幸徳の儒教倫理と「非戦論」 大原慧 現代と思想 一

週刊「平民新聞」覚え書 暉峻淩三 白山哲学 七

近代日本における社会政策思想の形成と展開―一―「国家政治」から「社会政治」へ　岡利郎　思想　五五八

大正社会主義者の「政治観」―「政治の否定」から「政治的対抗へ」　三谷太一郎　日本政治学年報一九六八年

大山郁夫の「亡命」について―戦前日本における多元的国家論の意義と限界　高橋彦博　大阪経大論集　七七

国家社会主義の再登場―高畠素之の施回の現代的意義　滝村隆一　現代の眼　二―一二

高畠素元論―大正社会主義の分化　田中真人　史林　五三―二

国家社会主義の発想様式―北一輝・高畠素之を中心に　橋川文三　日本政治学年報一九六八年

北一輝における「国家改造案原理大綱」成立の前提―「国体論及び純「正社会主義」にあらわれた　宮本盛太郎　法学論叢（京大）八六―一

昭和初頭の読者意識―芸術大衆化論の周辺　前田愛　比較文化　一六

J・W・ホールの「日本近代化」分析方法の提案をめぐって（上）　金原左門　日本歴史二六六

〃（下）　〃　二六七

色川大吉著「明治の文化」　ひろたまさき　歴史学研究三六六

J・ジーメス著本間英世訳「日本国家の近代化とロエスラー」　高柳俊一　ソフィア一九―一

辻橋三郎「近代文学者とキリスト教思想」　西垣勤　日本文学一九―二

〃　佐藤勝　国語と国文学四七―四

〃　高道基　キリスト教社会問題研究一六・一七

伝田功著「近代日本農政思想の研究」　藤原昭夫　社会経済史学三五―五・六

小栗純子著「日本近代社会と天理教」　金子圭助　日本仏教三二

中濃教篤著「近代日本の宗教と政治」　石川康明　現代宗教研究所所報三

大沢正道著「大杉栄研究」　高野澄　立命館文学二八二

湯浅泰雄著「近代日本の哲学と実存思想」　相良亨　実存主義五三

日本思想史学会会則

一、本会は日本思想史学会と称し、広く日本思想史の研究に従うものをもって組織する。

二、本会は会員相互の研鑽により斯学の発展に努めることを目的とする。

三、本会は前条の目的を達成するために左の事業を行なう。

(1) 大会及び研究会の開催

(2) 機関誌の発行

(3) その他本会の目的を達成するに必要な事業

四、会員を分って普通会員及び維持会員とする。普通会員は会費年額一、〇〇〇円（但し学生は五〇〇円）、維持会員は年額二、〇〇〇円を納入するものとする。

五、会員は機関誌の頒布を受け、機関誌への投稿及び研究会における発表、本会刊行物の講読、諸種の催しへの出席等に便宜が与えられる。

六、本会に左の役員を置く。

会　長　一　名　本会を代表し会務を総括する。

評議員　若干名　評議員会を構成し、会の運営に関する重要事項を審議決定する。

委　員　若干名　会の運営に関与し会務を処理する。

幹　事　若干名　委員を助け会務を処理する。

監　事　二　名　会計を監査する。

評議員及び監事は総会において選出する。その任期は二年とし重任を妨げない。会長は評議員の互選による。委員及び幹事は会長の委嘱による。

七、総会は年一回開き会則の変更、役員の人事、支部の設置、及びその他の重要事項を審議・決定する。必要に応じて臨時総会を開くことができる。

八、本会の事務所を東北大学文学部日本思想史学研究室に置く。

九、本会に支部を置くことができる。

発刊の辞

東北大学法文学部の開設とともに、故村岡典嗣氏を初代の主任教授として日本思想史学専攻が設立せられたのは大正十二年のことである。

昭和二十一年春、村岡氏が定年退官せられて後、後任者の得難きままに九年余を経て、昭和三十年に故竹岡勝也氏が就任せられた。しかし竹岡氏も在職二年にして定年退官せられ、一年を経て昭和三十三年に私が両教授の芳蝋をけがすことになった。

本専攻の学部（第三・四年）は「日本思想史学専攻」として文学部史学科に属し、大学院（修士・博士課程）は「国文学国語学日本思想史学専攻」として文学研究科に属している。日本思想史学の独立の講座を基礎として、日本史（国史）専攻、乃至は国文学専攻または倫理学専攻とは別に、独立した「日本思想史学専攻」が設けられているのは、東北大学のみである。

以上の如き本専攻の歴史と現状に鑑み、関係者相い諮って、専攻専属の機関誌として、本誌を刊行し、その研究・教育の状況を学の内外に紹介することにした。大方の御援助を仰ぐ次第である。

昭和四十二年三月

石田一良

日本思想史研究　第六号

昭和四十七年十二月十五日　印刷
昭和四十七年十二月二十五日　発行

編集代表者　石田一良

印刷所　仙台市原町四丁目九ノ十四　合名会社　共同印刷所

発行所　仙台市片平二丁目　東北大学文学部　日本思想史学研究室